

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 305
Tel. (045) 671-1109
振替 00200 - 1 - 47369
E-Mail : naka@church.jp http://church.jp/naka/
発行者 渡辺英俊 (題字 松橋 順)

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。
集会 主日礼拝 日曜日 午前10時30分より

共同体としての教会

—教会・教区・教団

寿から教会を考える ⑤

発題 石倉夕子

【「日本基督教団」の歩み】

- 1940年 宗教団体法施行
- 1941年 6月「日本基督教団」創立総会
- 1942年 6月ホーリネス系教会弾圧
- 1944年 4月「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督信徒に送る書翰」発表
- 1947年 5月3日、日本国憲法施行
- 1951年 旧日本基督教会系諸教会が教団を離脱
- 1952年 4月28日、対日平和条約、日米安保条約発効
- 1954年 「日本基督教団信仰告白」制定
- 1960年 5月20日、日米安保条約改定国会承認
- 1961年 常議員会で「宣教基本方針」採択
- 1967年 3月26日「第2次大戦下における日本基督教団の戦争責任の告白」発表
- 1968年 教団総会で万博キリスト教館出展決議
沖縄キリスト教団との合同可決
- 1970年 3月東京神学大学機動隊導入
- 1971年 5月「神奈川教区形成基本方針」採択

北村慈郎牧師の戒規免職問題が象徴するように、現在の日本基督教団(以下「教団」)には、「合同教会」とか「合同教会」かという大きな二つの流れがある(本誌一四七号参照)。教団は、その発足時の経過から、「合同教会」として歩んできたはずだが、現執行部は「合同教会」を全教団に押しつけようとしている。石倉夕子牧師の発題で、教団の歴史をひもときながら、教団や神奈川教区とのつながりのなかで、なか伝道所がこれからのように歩んでいくべきか語り合った。

「教団」の成立
私は、今の教団を語る上で、教団の成立経緯を知ることが避けられないものがあると思っている。『信徒必携』(一九八五年、改訂新版一九版)によると、一九四一年の教団の合同は「神のくすしき導き」によったものであるとされている。はたしてそうなのか? 教団の合同は組織として生き延びるための戦略であり、天皇制軍国主義への屈服、そして戦争への協力であったと思う。時の政治に迎合し、宮城遙拝を行い、国内各教会へまた朝鮮の教会へ神社参拝を勧め、教団・教会として戦闘機を戦地に送り、「日本基督教団より大東和共栄圏にある基督信徒に送る書翰」で戦争協力を呼びかけ、「神のくすしき導き」により集められた仲間を切り捨てた(一九四二年六月二六日、ホーリネス系教会が治安維持法違反を理由に弾圧を受けたことを指す)。教団成立の真相は以上のようなものである。

ともなく、過去に蓋をしたまま、その歩みを始めてしまったのである。

教団の新たな出発

私は一九六八年生まれ。教団の「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」(戦責告白)の出された翌年に命をいただいた。また、中学校での卒論が「戦責告白をめぐって」だったこともあり、このことには私のなかに強い思いがある。戦後二三年経ち、教団が初めてあの戦争に對しての責任を告白した。

「祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちいりました。わたくしどもは『見張り』の使命をないがしろにいたしました」。

この告白により、教団は自らを自由へと解き放ち、新たな一歩を踏み出したのだと思う。私はこのときの場を共有してはいない。しかしこのことに大きく関わった、当時、いまの私と同年齢だった世代の牧師たちから、まるで長老が若者たちに語るように、このときの産みの苦しみを、そして教団が本当の意味での合同教会として歩み出すためのビジョンをたびたび聞かされた。そしてそのことに共感し、今に至っている。

戦後も戦時中の指導者たちは自己弁護を繰り返して、自らを、そして教団の責任を問うことなく、その後の歩みを進めてしまった。教団はその足下の塵を払うこと

その後の教団の歩みをよく「荒野の四〇年」と言うことがある。聖書の時代の荒野の四〇年にたとえてのことである。これは、イスラエルの民がイスラエル共同体として強められるための試みだが、まさに戦責告白後の教団の歴史はそれと重ね合わせても

おかしくはない。教団が合同教会として歩むための試練のときだったと思う。

沖繩キリスト教団との合同、万博出展、東京神学大学機動隊導入というできごとは、戦責告白という立ち帰りの場、ビジョンにより、まさに教団がいま一度歴史から問われた時期、また神に問われた時期だった。そしてこの時期は、教団が一番悩み、苦しみ、もがいた大事なときだったのだ。私はこの四〇年間の本当に最後の最後、一九九〇年代に牧師になった。この頃から、教団は自らを再び伝統や組織を守るために、戦責告白以前に戻ってしまった。しかし一度自由になった者は再び不自由になることに直感的に「嫌だ」と感じる。そのような人たちによって、今に至るまで教団で教条主義や原理原則主義に抗う流れが担われ続けている。

現在の教団——二つの流れ

一九八九年、私は農村伝道神学校に入会した。その年の一月に昭和天皇が死去、教団においても「大喪の礼に関する声明」や「青森県六ヶ所村『核燃料サイクル施設建設』についての反対声明」などを採択している。そしてこの年、神学校の最終学年であった先輩が部落民宣言をし、教会内（教団内）の部落差別問題を改めて訴えた。このことは私のなかで「差別などしない」と甘い言葉を吐いてきた教団・教会に対して、そして、キリスト教とは何かを深く考えるきっかけとなった。これ以降、在日コリア

ンの青年たちとの指紋捺捺問題などに関する共働りや性差別問題など、教団が戦責告白以降突きつけられてきた問題にも末席ながら関わらせてもらった。

しかし、この頃から教団は、違いを認め合いながらいっしょに歩むという「合同教会」への幻を投げ捨てていく。一九九〇年代後半より、戦後は終わった、新しい世紀に向けて……と、またしても戦責告白などなかつたかのように世の動きと連動してしまった。小さくされた人たちの声など聞かえないかのように切り捨てている。その極みは北村牧師の戒規免職である。「再び伝統的な教理（『標準文法』）に立ち戻り、信条と規則の縛りによって教団の組織を守ろうとする力が支配してしまっている」とは渡辺英俊牧師の言葉だが、まさしくそうである。戦責告白以前の教団に戻りたいのか？ 決して戻ってはいけない。

今、教団は「合同教会」をめざし、多様性を認めない仲良しグループに成り下がっている。部落出身の牧師がそのことを宣言して堂々と赴任できるのか？ 性的マイノリティの牧師や信徒が堂々と教会に行くことができるのか？ 障がいを抱える者が牧師として受け入れられるのか？ また、信徒として受け入れられるのか？ 女性差別はないのか？ ホームレスの人が訪れたとき、その人をそのまま受け入れることができるのか？ 仲良しグループ的教会・教団であるならば、真の受け入れは不可能だろう。私たちの教団の未来はどうな

るのか、不安である。傍観者になるのは簡単だ。若い世代のなかには実際に傍観的立場の者も多い。だが、かつて教団のビジョンを熱く語ってくれた牧師たちのように、私たちもビジョンを語りたい。

教区、教団、そして教会

「神奈川教区形成基本方針」にもある通り、教会は常に社会からその在り方と信仰が問われている。それは教区という集団になろうが、教団という組織になろうが同じである。今の教団はこのことを放棄し、合同（しつつかある）教会の群れではなくなってしまう。伝統の異なる教会が、一緒になってやっていく。それが「合同」である。ところが今は、「合同」の教会の群れでなくてはいけないうようなのである。教条主義であり、多様性など認められない。このことは一九四一年の合同の歴史を負っていくことと異なる流れである。北村牧師は教団の現状からやむなく裁判という方法をとられた。「裁判を通し教団の体質を問うていく」。北村牧師の言葉である。これは北村牧師一人の問題ではない。この流れのなかで多くの志を同じくする人たちが声を上げた。教区として支援を表明したところもある。かつて先輩の牧師たちが語ってくれた歴史やビジョンを私も引き継いでいきたい。そしてそのことがいま閉塞的な状況にある教団が未来を切り拓く力となると信じたい。

（まとめ・文責 幸前元）

救援物資にはこぼれて ④ 郭鐘洙

学校を出て数分後には、湖と化した田圃が現れた。車を走らせていると、湖となった田圃の反対側に東北工業高校が見え、緑色の鉄柵に「屍体安置所」と大きく一文字ずつ開示版が貼り付けられていた。矢本中学から五分ほどのところだ。校長（義妹の弟）によると、津波は彼の中学校の三〇〇メートル手前まで押し寄せたそうである。

田圃から民家の建ち並ぶ道路に入った。壁や塀や建物が密集している所は、それが盾となって津波の勢いが多少とも弱められたようだ。歩道は分厚い泥に被われていた。一見何もなかったように見える建物の中を見ると、内には何もなく、ただ薄暗く空のゴミ箱のようにガランとしていた。

途中、同行した仙台の従姉の妹の寺に寄った。父親の葬式の時に見初められてこの寺に嫁いだそうだ。縁は異なるものである。何度か出戻りをしたそうだが、やはり縁は異なるものである。この高台にある寺にも二〇〇名ほどの人が避難しているとのことだった。トイレもままならない有様で、水は寺の井戸を利用していた。貴重なお茶をいただきながら、三〇分ほど消息を尋ね合い、涙をまじえて談笑した。その

最後に震度3くらいの揺れが一分ほど続いた。義妹は悲鳴を上げた。みんな開き直っているつもりでも、一分も揺れが続くと誰一人固唾を吞まずにはいられなかった。年の頃三五〜六才の寺の次男坊が、「ほんとうにこんな時、自衛隊は役に立たない。国は何をやっているのだ。いくらでも道が通れるのに支援物資を持って行かない。決まった所にしか行かないんだ。だから、俺たち民間のボランティア

使信

多くの肢体があつてこそ

わたなべえいしゅん
渡辺英俊

……というのは、人間のからだも一つの肢体だけでなく、多くの肢体でできているからです。もし両足が、自分たちは手ではないからからだに属さないと云ったとしても、それではからだに属さないことにはなりません。耳が自分では目ではないからからだに属さないこと云々としても、それではからだに属さないことにはなりません。もしからだ全体が目だったら、どこで聞きますか。もしからだ全体が耳だったら、どこで嗅ぎますか。そうではなくて、神はからだにそれぞれの肢体を設けられました。これは神がかくあれかしと願われたことです。もし逆に、全体が一つの肢体だけであつたら、どこに体があるでしょうか。むしろ多くの肢体があつてこそ一つのからだなのです。ですから、目が手に「おまえは要らない」と言つて行きますし、あるいはまた、頭が両足に「おまえたちは要らない」と言つて行きます。いやそれどころか、からだの中でより弱いと思われる肢体こそが重要なのです……。

(コリントの信徒への手紙1

一 二章一四〜二節 私訳)

合同教会とは？

キリスト教と言つてもいろいろあるものだから、何でこんなに違うの？と、よく聞かれるんですけど。そりゃ、人にもいろいろあるわけですから、キリスト教にも

いろいろなわけで、仏教の場合と同様、いろいろな指導者が新しい宗旨を始め、それが伝統として受け継がれて行つて「教派」になつたんですね。ただ、キリスト教の場合、すぐれた個人からというより、それぞれの時代と文化、地域で生まれた伝統が、教派になつていった側面が強いんですね。教派があることのメリットは、それぞれ

スーとねえ

(アドベントに伝道所で「クリスマスはイエス様の誕生日」という話を聞いた帰りの電車で、母から「イエス様はこんな人かな」という話を聞いた数日後)

花 (小声で) 「お母さん、今日花、保育園でイエス見ちゃった。」
母 「えっ? 保育園で?」
花 「そう。紙芝居。やさしそうな人だったよ。」

(最近イエス様に興味ありの幸前花 五才)

うだつたように、既成の政治・宗教権力の腐敗に対する改革の闘いが、福音からの霊的な力に支えられて、新しい福音理解を生んで行つた……。だから、教派がいろいろあるということは、福音理解の多様性と豊かさのしるしなんです。

でも、組織がばらばらだと、互いの違いを主張して角突き合ひになる弊害もありますよ。だから、違いを大切にしながら、合同の動きもだいたいなわけ。わたしたちの日本キリスト教団というのは、それを目指していろいろな教派がいつしよになつてきたんですね。もつとも、そので方には大きな問題があつて、天皇政權が太平洋戦争を始める準備の一つとして、宗教団体を一つにまとめておこうとした、その圧力に負けて一つになつた、という側面が強かつた……。そこには精算して置かねばならない問題が山ほどあるんですけど。

「イアが動くしきやないんだ。個人で必死になつてやつているんだ。」と、突然心の内を掃き捨てるように憤つた。

「東京に帰つたら皆さん、伝えて下さい、この厳しい現状を。これじゃ何のための自衛隊で、誰のために国が動くべきか、全然わかつていないんだ。」と、続けて声を張り上げた。宮城訛りの、この惨状に対する訴えかけが心に残つた。東京に出ている長男(兄貴)の分まで、この次男の肩にかかつていた。

そこでの唯一の救いは、この次男の二人の娘だった。小学生の姉妹の姉の方が急に立つて向こうの部屋から、去年のクラシックパレーの発表会で入賞した時のDVDを順番に見せてくれた。

この屈託のない二人の子どもは、こんな時でも何よりわれわれの明るい未来なのだ。私は思い計つて笑顔で

「とても素晴らしい踊りだね。将来は二人ともプリマドンナになるね!」と感激して見せた。天使の屈託のない笑みが返つて来た。(続)

も、今、わたしたちが教団に参加しているのは、「合同教会」であることを大切にしたいからなんです。

一つのからだ

紀元一世紀のキリスト教も、急速に地中海世界に広がつたんで、地域ごとにいろいろな教会があつて。特にパウロは当時の急進的な改革派で少数派だったものだから、保守派からの妨害もあつたようなんです。また、パウロが開拓したコリント教

会は、港で栄えたコリントの下町に周辺各地から流れこんでくる人たちの集まりで、言葉も違えば宗教も文化も生活習慣も違う……。いつしよに食卓を囲むことなんて考えられない人たちがいつしよになってきていたんで、対立や分裂が起こることもあった……。彼はそれに対して、互いに切り捨て合ってはいけないと戒めているんですね。

人間のからだを例にとつて、足が手と違っているから、自分は仲間じゃない……。耳が目と違っているから、自分は仲間じゃない……。なんて言っていたら、体は成り立たないじゃないか。また逆に、足が手に向かって、おまえはオレと違っているから出

て行け、などと言ったら……。あるいは頭が足に向かって、おまえたちはオレと違うから仲間と認めない、などと言ったら、体は成り立たないじゃないか。そうじゃなく、互いに違った肢体がいろいろあるから一つのからだなんじゃないか……。みんな同じ一つの肢体だけだったからだにならぬじゃないか……。違っているからこそ一つなんだよ、と言っているんですね。

違いの豊かさ

パウロがコリントの教会に向かつて言っていることは、日本キリスト教団のような「合同教会」では特に大切だと思ふんですよ。違った伝統を持った人たちがいつしよ

になつていいるんですから、考え方にも違いがある。違った考えがいつしよにあるから、新しい考え方も出てきやすい……。違いがあることをいけないうことと考えないで、むしろ豊かにされていることと受け止めて行こう。そこに議論が起こり、議論を積み重ねることによって、互いに深められ、新しい道も見つけられる……。違いを大切に合うことによって、そういう創造性を持った教会になれるんですね。

これに対して、世界中の教会が一つの組織で、一つの信仰理解にならなければいけない、それが「合同教会」ということだと考える人たちがいて……。多様なだけではないけない、一つを指さなければ……と

問いかけ続けてくださることは意味があると思うんですけど……。でも、特定の教派の伝統を教団全体に押しつけ、違った考え方の者を切り捨てて一つになつてしまおうとするのはやめてほしいんですね。それは福音とは異質の、自分と違うものの存在を許せない偏狭なメンタリティからきていると思うんですね。

「聖なる公同教会」というのは信じるもの、そして目指すもので、違いを切り捨て、似たもの同士だけでこの地上に作つてしまえるものではないと思うんですね。違った多くの肢体があるからこそ、一つのからであり、違うからこそ豊かなのだと知ってほしいんですね。

＊ ＊ ＊

支援献金（十一月分）

支援献金（十二月分）

クリスマス献金（12/1～1/15）

感謝してご報告いたします。

渡辺英俊著新刊

「虹を追つて―ある牧師の五〇年」

ラキネット出版

（¥1000 送料¥210）

目次

第1章 模索の四半世紀

第2章 疾走の四半世紀

付論I 対談「草の根の解放の神学を訪ねる」

付論II イエスを読み解く鍵

付論III 都市社会下層の地域共同体

申し込みは、振替でなか伝道所へ

まど

▽十二月三日、大阪RINKの二〇周年記念集會に招かれ、移住者支援運動の二〇年を振り返ってレポート。移住労働者と連帯する全国ネットワークの一翼を担って下さっている団体が、二〇年の年輪を重ねていることの意味を実感。

▽国連人権理事会移民問題特別報告者ブスタマンテ氏の報告をきちんと受け止めることを求めて省庁巡り。十二月七日午後、外務省、内閣府、文科省、別チームが法務省。今回は与党議員が付き添って下さったので、各省庁とも政務官が対応して下さり、二〇分ほどながら意見を交換。政策に反映するところまではほど遠いとはいえ、トップにまで声が届くようになったことに意味があったと評価。

▽ブスタマンテ報告を受けて、十二月

一七日、国連移住労働者デー記念シンポ。国連広報部、国際移民機構（IOM）の後援も受けて。パネリストとして「包括的移民政策へのロードマップ」について発題。思い切り絵に描いた餅ながら、国連人権諸機関から求められていることを、政府がまったくやる気にならない現状で、市民の側から言っていくことが必要。百人余りの参加者に訴え。

▽十二月二五日クリスマスマス礼拝は子どもも含め五九人の出席。夏に隣室に借り増して礼拝室スペースが広くなっていたはずなのに、ドアの向こうの隣室まで溢れる人数。数以上に恵まれているのは、顔ぶれの多彩さ。正にゴージャス！感謝の内に新しい年の歩みへ。（渡辺英俊）